
俺とハロウィンと馬鹿騒ぎ

げんげん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とハロウィンと馬鹿騒ぎ

【Nコード】

N0374Y

【作者名】

げんげん

【あらすじ】

バカとテストとショタ少年！？の番外編のようなものです。

ぶっちゃけたただコスパレをしているだけですが……

初見の方は、バカとテストとショタ少年の人物紹介をちらっと見れば、おおまかなことはわかると思います

(前書き)

どうかハロウィンに間に合ったああ

静かな部屋。暖かな日差し。そんな久々の休日を俺は満喫していた。といっても俺はつい最近、文月学園に入学したばかりであり、この前までは春休みだったわけだが。まあ、入学早々、試験召喚戦争なんてやっていれば、休日だってなつかしくなるだろう。

そんな休日の一つ文句があるとするれば、それは一人暮らしの休日じゃないことだ。根本のバカのせいで爽兄が来て、休日にゆっくりなんて出来ない。

本当なら、昼過ぎまで寝ていて、ごろごろまったり過ごすはずだったのに。朝から爽兄に起こされ、小言を聞きはつきり言っただけ。まあすぎたことはしょうがないけど。

「健吾、なにをしているんですか？」

「なにくつろいでるんだよ。掃除終わったし」

「今から友達が来るんですよ？　ちゃんとしなさい」

「友達？」

はて誰のことだろう。明久たちは今日家にくる予定はないはずだ。そもそも俺の家も知らないだろう。中学校の友人や、爽兄の友人だって、こんなところまではこないはずだ。

「友達ってだー！？」

トスッ、という鈍い音と後頭部に走る痛み。そして薄れていく意識。

「……………健吾、すまない」

俺が意識を手放す直前、そんなムツツリーニの声が聞こえた気がし

た。

「…………ご。健吾！」

どこからか声が聞こえる。聞き覚えのある声だ。この野太い声は雄二だな。なんでいるんだよ。なにかに巻き込まれそうな予感がするので、寝たふりをする。

「おいっ、健吾起きろ！！」

うるせえよ。耳元で騒ぐな。絶対に起きねえぞ。

「たくっ、おいムツツリーニ。起きない見たいだから撮っていいぞ」
「……………了解」

カチャカチャとカメラを操作する音が聞こえる。起きたら巻き込まれると思ったが、もしかしたら、いや、もしかしなくても俺……………

「巻き込まれてるううう！」

「うわっ、びっくりしたあ」

がばっと飛び起きる。ふと自分の体を見ると、全て真っ黒。どうやら服を着替えさせられたようだ。むっ、頭にもなんか乗ってるな。これは……………帽子？

「健吾、突然起きないでよ。驚いたじゃないか」

「ああ。悪いな明……………久？」

目の前にいる吉井 明久（のはずの物体）に目を丸くする。顔の所

々に包帯が巻かれている。
これは……………。

「島田か雄二にとうとうそこまで……………」

「違う！ コスプレ！！　なんで僕が包帯巻くまで殴られなくちゃいけないのさ！　そこまで嫌われてないよ！」

「俺はいつかやってやろうと思ってたんだがな」

「ウチも」

島田の声に振り返ると、ソファに島田が座っていた。島田もおかしな服装だ。そういえば雄二ムツツリー二も変な格好をしている気がする。

「罰ゲームかなにかか？」

「なに言ってるんだよ健吾。今はハロウインの時期でしょ？」

「ハロウイン？」

確かにそんな時期だな。てことは明久はミイラ男。ムツツリー二は吸血鬼。雄二は狼男。島田は……………かぼちゃか？　オレンジ色だし。ところどころかぼちゃの顔だし。それと俺たちになんの関係が？

「大体、ハロウインは高校生がやるもんじゃないぞ」

「うん。僕たちは付き添い。今回のメインは……………」

「葉月、ハロウイン楽しみです！」

「葉月ちゃんと健吾だよ」

ちびっ子が満面の笑みで俺を見ている。そもそも俺は高校生だからハロウインは別に……………

「島田 葉月です。魔女さんっ、よろしくです」

「ああ。って魔女？」

改めて自分の格好を見る。黒い布だと思っていたが、これ、魔女の衣装だぞ！

「おい明久、どういことだ」

「ほ、ほらみんな仮装してるし……」

明久はあとで処刑だ。

「お待たせしてすみません！」

「……着替えが長引いた」

ふすまを開けて姫路と霧島が出てくる。ちなみにちゃんとしたコスプレで、だ。姫路の方は天使。霧島が悪魔のコスプレだな。霧島はあつてるような……。

「僕も準備できました」

爽兄がいつのまにかやってくる。爽兄は……？

「爽兄。なにその格好」

「いや、突然だったので衣装が見当たらず。スーツでも吸血鬼くらいには見えるかなと思ったのですが」

（（いや、ホストにしか見えないよそれ））

しかし、こうやって見ると変だな。コスプレをした高校生がたくさん……ってあれ？

「秀吉は？」

「秀吉は……あっ出てきた」

違う部屋から秀吉が出てくる。黒猫だな。あつ、ムツツリーニが写真撮り始めた。

「よしっ、みんな準備できたみたいだし。早速出かけよう」

明久が玄関へと向かう。やれやれ。面倒だが付き合ってやるか。

「おい翔子。この手錠はなんだ？」

「いたずら」

「ちよつと度が過ぎて……ってぎゃー！！」

後ろでなにか起きた気がしたが、きにしないでおこう。

「魔女さん。名前はなんて言うですか？」

「俺か？ 榊田 健吾だ」

「島田 葉月です！ よろしくです健吾くん」

苗字が島田ってことは島田の妹か。

「一軒目行くよ」

明久の呼びかけで一軒目を回る。突然の訪問にもかかわらずお菓子はしっかりと用意されていた。ちなみに二軒目、三軒目もだ。

「なんだ？ この地区はハロウィンに力でも入れてるのか？」

「違うよ。僕が事前に言っておいたんだ。ねっ葉月ちゃん」

「はいっ、馬鹿なお兄ちゃん優しいです」

全部島田の妹のためってことか。いいところあるじゃねえか馬鹿なお兄ちゃんwww

「で、つぎはどこにいくんだ？ 馬鹿なお兄ちゃん」

「ちよっと健吾」

「ほら、どこだ」

「あとは……」

明久はいろんなところに言って回ったようで、帰るころには両手がお菓子で一杯になっていた。

「それじゃあ、ありがとね。アキ。じゃあねみんな」

「さようならです。」

島田たちは暗くなる前にそう言って帰っていった。

「じゃあ僕らも帰ろうかなじゃあね健吾。爽吾さん」

「さようなら健吾くん。爽ゴキブリさん」

「……バイバイ榊田。さあ雄二、帰ってからいたずらの続き」

「ま、まて翔子。菓子ならやるぞ」

「……お菓子をくれてもいたずらはやめない」

「理不尽だああああ」

こうして全員が帰っていった。いちおう雄二の無事は願っておこう。

「それにしてもよかったですね。いい方々に知り合えて」

「まあね。馬鹿ばっかだけど」

「さっ、中に入りましょう」

こうして俺の休日は終わった。一つ変わったことといえば、俺の部屋にコスプレをした高校生の写真が飾られたことだ。

まああいつらのことだ。これからももっとたくさん、馬鹿騒ぎをするんだろうな。もちろん、俺も爽兄も一緒に……。

（後書き）

オチがないですねえ。

こんど投稿するころにはオチをつけられようになりたいと思います

今回で興味を持ってくれた方。

本編のバカとテストとシヲ少年も見てくださいとありがたいっす

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374y/>

俺とハロウィンと馬鹿騒ぎ

2011年10月30日00時11分発行